
姉の日常 妹の困惑

鳩梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉の日常 妹の困惑

【Nコード】

N5074B

【作者名】

鳩梨

【あらすじ】

両親のいない二人ぼっちの姉妹。妹が大好きでそれを隠さない姉と、姉が好きだけど素直になれない妹。そんな二人の日常を姉と妹二人の視点で描く百合コメディ。

ブローグゝいつもの朝ゝ

どたどたと朝っぱらから騒がしい物音が聞こえる。

アタシは騒がしくなる原因をちゃゝんと知っているので、思わず顔がにやけてしまう。

朝。

いつも朝早くに起きるアタシは、今日はいつも起きる時間の六時よりも更に早く、四時には起きてある事をした後、リビングでニユースを見ながら優雅にブラックなコーヒーを飲んでいた。

きつと、アタシの今の心に色をつけるならこのコーヒーよりも黒くなるに違いない。

そんな風に思っていると、バン、と大きな音と共に騒音の元が入ってきた。

ソファに座っていたアタシは自然とリビングの入り口に背を向けることになっているので、にやける顔を持てる限りの理性を総動員して無理矢理抑え、なんでもない風に首だけで振り向いた。

「姉ちゃん！ アンタまたこんなことして！」

おーおー朝から大声を出して……近所さんに迷惑じゃないか。

それに、せっかくそんなにカワイイのだから、そんな言葉遣いはお姉ちゃん感心しないぞ。

そんなことを心中でニヤニヤしながら思う。

リビングに入ってきたのはベビードールを着た可愛らしい子。ちょつとクセのある亜麻色の長い髪は寝起きだからか、少しぼさぼさになっている。身長も低く全体的に幼い感じのするこの子には、アタシの思った通りベビードールがものすごく似合う。もう、ちょーかわいっ。このまま抱きつきたいわ！

けど、せっかく抑えに抑えて平常心を装っているのだから、ここで欲望に忠実になってボ口を出すのは良くない。ガマンガマン、と。「朝っぱらから大声出さないの。わかった、ユンちゃん」

アタシはめっ、とお姉さんぶって叱ってみる。

「うるさいっ！ この馬鹿姉！ こういうことするのやめてって言ってるでしょ！」

やめられないよ。もう、わかってるくせに。

心の中は下心全開で外に出せないくらいエライことになっているが、そこはそれ。年上、それもお姉ちゃんとして、気付かれないようにバレないように巧妙に隠しながら、真顔で諭してあげる。アタシって良い姉！

「ダメよюнちゃん。実のお姉ちゃんにそんな乱暴な口利いちゃ。

それと、朝起きたら『おはよう』でしょ？」

「ああもうこの馬鹿姉は！ 反省の色が窺えない！ ってか何！？

私が悪いみたいに言われてる！」

ダンダンと地団駄を踏み出した。

もう、ダメよюнちゃん。そんなはしたないことしたら、ただでさえ短いベビードールが捲れちゃってスキャンティーが見えちゃう。あ、それともわかってて見せてくれるのかしら。юнちゃんってば素直じゃないもんね。そうやって怒ってる風を装って愛しいお姉ちゃんにサービスしてくれてるのね。まあ、いじらしい！

はっ！ いけないわ。ここは衝動的に抱きついて頬擦りするところじゃなくて、お姉ちゃんとして、ちゃんと妹に悪いことは悪いのだと躡てあげなきゃ。

…… 躡。身を美しく。くふふ、いい響きだわ。

アタシはすぐにでもルパンみたいにюнちゃんに飛びつきたくなく欲望に忠実な心を、精一杯、むしろ一杯一杯に叱咤し、どうにかこうにか妹を叱る姉を演じる。

本当はカッワイイ妹に今すぐハグして部屋に拉致って今日は平日だけど学校サボって一日中二人でいちゃいちゃしていたのだけど、そんなことをすると良くても三日間は口を利いてくれなくなる。さすがにそんなことになるアタシは一時間と持たずに発狂するか、根の国ツアーにお出かけすることになるのでここは必死に我慢。

ユンちゃんだってお姉ちゃんといちゃいちゃするの好きにくせに。思うも、やっぱりこんなことを言っているとユンちゃんは真っ赤になつて怒るから自粛。あ、でも。怒ったユンちゃんも力ワイイから、わかつててわざと言つのも手かもしれない。

……どうしよう。

ユンちゃんは地団駄を踏み疲れたのか、肩でぜーはーと息をしながら「姉ちゃん聞いてる!？」と何故かアタシを睨んでいるが、とりあえず無視。今はそれよりももっと大事なことを考えなくちゃいけないかった。

例えるならそう、万有引力を発見することに勝るとも劣らないほどに大事なことなのよ!

……そういえば、ニュートンって万有引力を木から落ちたリンゴから発見したのよね。

てことは、アタシの場合もユンちゃんのことを見てれば何か大事なことを思いつくかも?

いいえ、違うわね。かもじゃないわ。見つけちゃうはず!

「——だいたい姉ちゃんは……って、な、何よ!　なんでそんなマジで見てくるのよ!」

じーっ、と見つめるアタシに、なぜかユンちゃんはうつろたえる。

ああ。やっぱり幼児体型なユンちゃんには本当にもう惚れ惚れするくらいベビードールが似合うなあ。襟元のレースや裾の部分にあるらわれたフリルとか。胸元に入ったスリットをリボンで結んでるけど、そのリボンもレースがついてて煽情的って言うよりも力ワイさ倍増、うっん、乗増だわ。透けて見える胸もちちゃくてたまらなく力ワイイし。ピンクっていうのも女の子らしくていいわね。ああ、ああもう……もうっこのままだとお姉ちゃんどうになっちゃうそう!

たしかさっきまでは何か別のことを考えていた気がするけど、もうこの際どうでもいいや。ついでに理性とか自粛とかそういう欲望に否定的なモノもどーでもいいわ。丸めてゴミ箱にポイよポイ。

「ユンちゃん。ちょっとこっちに来て」

アタシを疑わしそうな目つきで睨んでいたユンちゃんを手招きする。

何故かジリ、と後ずさるユンちゃん。その目は何故だか怪しいモノを見る目つき。なんでそんなに恥ずかしがるのかなあユンちゃん。けど、そんなユンちゃんもラヴリー。

「ほらほら。ユンちゃんこっちへいらっしやい」

アタシがニコニコしながら再度呼びかけると、しばしの間を置いてから、ハアと溜め息を吐いて渋々と言う感じでアタシの横に座った。素直じゃないユンちゃんはいつもこんな感じだけど、アタシにはそこがまたたまらない。とっても愛しい。

けど、

「ユンちゃん。もっとこっちに来て」

「はあ。姉ちゃんさあ私の話ってか抗議をちゃんと聞いてる？」

「うんうん。聞いてるからこっちにもっと寄って」

「なんで？ あんまり近寄るのもどうかと思うんだけど……てか着替えたい」

「いいからいいから早くこっち寄るの！ じやないとお姉ちゃん泣くからね！ あとあと、着替えたらお姉ちゃんもうユンちゃんと口を利いてあげないからね」

「……お好きにどうぞ」

「ユンちゃんひどいっ！」

うわん、とアタシは本気っぽいウソ泣きをする。うう、本当に涙が出てきた。

そんなお姉ちゃんを見かねたのか、それとも可哀想だと思ったのか。それよりももっと単純に、やっぱりお姉ちゃんのことを大好きだからか、しょーがないなあ、とか溜め息を吐きながらユンちゃんにはアタシの近くに来てくれた。

ユンちゃんはたまにイジワルだけど、やっぱり優しい。お姉ちゃんはそんなユンちゃんが大好きだよ。

「それで何？ 早くしてよね。この格好本気で恥ずいんだから」

ユンちゃんの顔は朱色に染まっていて言葉通り恥ずかしそうにしている。何となく怒ってる風なのは照れ隠しだとお姉ちゃんは知っているから、そんな風に睨まれても恐くないもん。

「うん。ユンちゃん」

えへへ〜と笑いながらユンちゃんに逃げる隙を一切与えず抱きつく。ベビードールとスキャンテイルというこれでもかと肌の露出の多い、けれどカワイイ格好だから抱きついたアタシはほんとど直にユンちゃんの体温を感じられる。あったかい〜。

ああ、幸せ。

「ちよ、またなのか馬鹿姉！ ああ、もうホントに恥ずかしいから離れてよ！」

口ではそうやって嫌がるけど全然抵抗しないユンちゃんがカワイくて、アタシはもつとぎゅーっと抱きしめる。

すぐ傍にあるユンちゃんの耳が真っ赤になってる。

「恥ずかしくなんてないない。二人しかいないんだもん」

「……満足したら放してよね。学校、遅れちゃう」

そうやって言いながら、アタシの肩に顎を乗せるユンちゃんがたまらなく愛しい。

そう、二人しかいないんだから、これくらいしないと寂しくて死んじゃう。

アタシたち姉妹の二人だけの朝は、大体こんな感じで始まる。

「おはよう、ユンちゃん」

「おはよ、お姉ちゃん」

一話／日情……もとい日常／

【1】

私、春野夕陽の起床時間はそこそこ普通だ。

学校から徒歩十五分程度の位置に家があり、八時二十五分から学校は始まるので、七時半には起きるようにしている。

私は基本低血圧気味なので起きる時間は日によっては若干ぶれがある。それでもそこまで遅くなることは、あまり無い。

本なら部活の朝練があるからもつと早くに起きなくてはいけなのだけど、朝練に強制参加の義務は無いので、私はそれをいいことに朝練には参加していない。友人や先輩からは何故か参加を強く要求されているが、朝の貴重な睡眠時間と部活の朝練を天秤にかけるとどうしても睡眠時間に傾いてしまう。

で。姉である春野陽菜は何故かいつもかなり早くに起きている。具体的に何時に起きているのかは私も知らないが、私がたまに早起きした時も先に起きていて「おはよう」と紅茶を飲みながら優雅に声をかけてくる。姉に起こされた記憶は数えるのも馬鹿馬鹿しくなるくらいあるが、起こした記憶は数える必要が無い、つまりはゼロで無だ。

そんな私たち姉妹はよほどのこと、それこそ病気や事故にでも遭わない限り遅刻などする余地が無い。

……無いはずなのだが、何故か私は教室でぜはーぜはーと明らかに全力疾走したように肩で思いつきり息をしている。いきなりの運動に、心臓が抗議するかのようにもものすごいテンポで脈打っていることが、胸に手を当てなくても十二分にわかる。

「おはよう、ゆうちゃん」

「おっはろー夕陽」

机に突っ伏してぜはーぜはー言ってる私に、そう元気よく声をかけてくるものが二ついた。……訂正。二人だった。

「お……おはよ」

私は息も絶え絶えにようよう挨拶を返す。声を出すのがしんどい。

「うあー……だいじょうぶ？」

「ううむ。コレはもうダメね。買い替え時だわ」

片方が私を本当に心配そうにいたわり、もう片方があーあ、とか言いながらなんとも友達思いな言葉を吐く。

「私は……家電か」

なんとかそう言い返すが、もうダメだった。これ以上はもう声は出ない。朝ご飯抜きの全力疾走は思いのほか身体に負担が大きい。てか大きすぎ。うう、保健室で休みたい……。

先ほども言ったように、私はよほどの大事が無い限り遅刻も、ついでに言うなら遅れそうになることすら無いのだ。ましてや朝ご飯を食べ損ねるなどと言う早起きの無駄は、絶対にありえないし、ありえてはいけなはずなのだ。

なのに、なのにあんの馬鹿姉のせいで、遅刻寸前だわ朝ご飯抜きだわでもう散々。

そりゃね。言ったよ。満足したら離してね、って。けどさ。時間が差し迫ってるって言うのにギリのギリッギリまで抱きしめたまま離さないってのはどういうことよ。

私だってわからないでもないよ、お姉ちゃんの気持ち。父も母も居ない二人だけの家族だから、その寂しさを紛らわすために過剰かもしれないスキンシップをするのも、それがお姉ちゃんだけじゃなく私のためであるというのも……。

けどさ、それで結果遅刻したらダメでしょう。それ以前に朝ご飯という、一日の始まりを円滑に進行させるためのエネルギー源を摂取できないなんて言う事態に陥っちゃあ、ダメのダメダメじゃないかと切実に思う。

こんな時に顔の一部をもぎ取って提供してくれる正義の味方が居れば……。

そんなことを真面目に考えてしまふあたり、相当ヤバイのではな

いだろうか？

「ああ！ ゆうちゃんから生氣が抜けていく！？ ど、どうしようまーちゃん」

「あれま。まあ、最近の家電は逝きやすいらしいし。しょうがないわよ琴乃」

真白よ、本日の私の位置付けは家電で決定ですか。

私は相も変わらずことなく失礼な友人に内心でやれやれと溜め息を吐く。それに引き換え、琴乃。アンタはいい子だ。その優しさの一〇分の一でいいから真白に分けてあげて。

さつきから私の周りで対照的なことを言ってる二人は私の中学からの友人で、優しい方が弦端琴乃。失礼な方が雪槻真白。

琴乃は色白で、ボブカットの青味がかった黒い髪が特徴。感情や表情がコロコロ動くので見てて飽きない。女の子の子していて同姓の私から見ても可愛らしいと思う。ただ、その身長が一六五もあり起伏に富んでた豊かな体型であることが、私としてはどうにも釈然としない。

真白は日本育ちのハーフで肌が白人のように白くて記号のように金髪碧眼で、いつも眠たそうな半眼。ハーフだけど日本語以外の言語は全くダメで、日本以外を、漢字の国、カタカナの国、記号の国と三力国に分けて表現するほど。琴乃とは性格も体型も対照的。体型だけで言うなら私の同類。本人はまったく気にしていないが。

二人とも個性的だが、とても良い私の友人。親友と言ってもいいかもしれない。

「ねえねえまーちゃん。ゆうちゃんは家電で例えると何になるの？」

「そうねえ……冷蔵庫あたりじゃない？」

「ああ、たくさん食べるもんね」

「言いて妙でしょ」

「けどさ、それなら掃除機の方があつてないかな？」

「ああ、あれは何でも飲み込むものね。じゃ夕陽は掃除機ということ」

……………親友？

二人の勝手な上にあんまりな物言いに、私はほんの少し首を傾げたくなった。てかコラ琴乃。アンタなんで納得してるのさ。好き勝手言う真白はもうアウトだとしても、アンタまでそれに付き合う必要はないでしょうが。

口に出して言うてやりたいけど、疲労度数が高すぎてその気力が無い。

私はぐたと机に突っ伏したまま、いまだになにやら好き勝手なことを言うてる二人の会話をBGMに窓の外にある空を見る。……あ、あの雲ドーナツみたい。

うつ、食べ物のこと考えたら余計に疲労度数が……むしろ空腹感が水沸騰時の泡沫のように湧き上がる。

「ところで……なんで夕陽はこんな状態に？」

「そう言えば。ねね、ゆうちゃん。何かあったの？」

今ごろそれを訊くのか二人とも。

今さらな二人にこういう奴らだと分かっていながらも脱力してしまつ。まあ、さっきから全然力が入ってないわけだけど。

私は突っ伏したまま顔だけ上げて説明してやることにした。

「朝食を摂り損ねたのよ」

「ええ？　どんな状況でも必ず三食バツチシ人並み以上に摂るゆうちゃんが！？」

「やめてほしいわね……真白は今日傘を持ってきてないんだからこのヤロウ……」

「しかたないでしょ。色々あつたんだから」

「ふう〜ん。ねね、まーちゃん、今日はなんか暑いね」

「そうねえ琴乃。いやあ朝から暑い暑い」

「……なによ」

途端に仲良くニヤニヤと笑い出す琴乃と真白。暑いといいながら手を団扇みたく扇いでるのがなんかむかつく。

「しょーがないでしょ。起きたらなんでか私はベビードールとスキ

ヤンティーというありえない格好になってるし、朝から姉ちゃんはベタついてくるし、そんな姉ちゃんの要望に応えてたら時間がやばくなってるし、朝から全力疾走なんて拷問以外の何モノでもないわ……って、だから何でそんなにニヤついてるのよ!」

「だって……ゆうちゃんてすごい格好で寝るのね」

「そうね、けどすごい似合ってるそう。それにしても春野姉妹は朝からもうラヴラヴなのね。やっぱりアレ? 登校は二人仲良くで、夕陽が手を引いて走ったの?」

「な!?! 見てたの?」

「まさか。考えるまでも無くわかるわよ」

さらっとクールに、むしろ冷たく言う真白。思わずぐう、などと唸ってしまう。琴乃はくすくすと笑ってるし。

私はともかく、姉が妹である私をとて大事にしてくれていることをこの二人は知っている。別に私がわざわざ教えたのではなく、あの馬鹿姉は誰が見ていようが関係なく素で抱きついてくるわ手を繋いでくるわ、それだけならまだしも頬にちゅってしてきたり、結構大胆なコミュニケーションをとってくる。そりゃ教えなくてもわかるというものだろう。

まあ、中学に上がるまでそれくらいのことは普通なのだろうと考えていた私もどうかと思うが。

「で、なんで朝から全力疾走なんて馬鹿みたいなことしたの?」

あうっ。

私は上げていた顔を、ゴン、と机に打ち付け再び突っ伏した。

そう。真白の言う通り全力疾走をしたことは本当に馬鹿みたいなことなのだ。

だって、この時間の教室は朝練を終えた生徒たちも戻ってくるので結構賑やかで、私たちみたいに皆他愛も無いお喋りを繰り広げていたりいなかったりする。つまり、時間的余裕がそれくらい十二分

にあるということだ。

今の時間は八時をちよつとすぎたくらい。走るところかのんびり歩いても良かったくらいだ。

ちらり、と二人を窺うと琴乃は不思議そうに首を傾げており、真白は常の通りの眠たそうな半眼で私を見ていた。たぶんだけど、真白には大体の予想はついているのだろつと思われる。それでもこうして私自身の口から言わせようというのだから、性格が悪いとしか言いようが無い。絶対サディストだよコイツ。

時間がくるまでこうして突つ伏して黙秘を貫いていたいが、多分無理だ。いつまでも黙っていたら、痺れを切らした琴乃は無邪気に、真白は悪意たつぷりに私が口を開くまで訊ねてくるに違いない。それだけならまだいい。真白は暇つぶしにあること無いことを言いそうな気がして怖い。それ以上にそれを純粹に信じそうな琴乃が余計に怖い。

私は答えるしかない状況に泣きたくなつた。だって、これから話すことはあまりにも馬鹿すぎるんだもの……。

はぁ、と溜め息を吐いてから、顔は上げずに説明を開始する。渋々と。

「……家の時計がね、早くなつてたの。壁掛け時計から電話、目覚まし、腕時計、家にある時計全部が」

一、二、三……

「あははゝゆうちゃん抜けてるゝ」

「いるのねゝそんな馬鹿みたいなのをしてのけるヤツ」

私の予想通りな反応をしてくれる友達思いな二人。もおやだ……。

私は無駄な疲労と空腹感と笑ひ者にされているという羞恥から、完全に机に沈んだ。

お姉ちゃんのばかぁ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074b/>

姉の日常 妹の困惑

2010年10月9日03時02分発行